

9. 安政3年五霊大明神と神光寺の梵鐘調査

東 昇

1. 五霊大明神と神光寺の釣鐘

安政3年(1856)4月の「氏神五霊大明神并氏寺両所釣鐘名并豎幅寸法書上帳」(岩座神地区文書1-108)には、五霊大明神と神光寺の梵鐘が記されている(史料翻刻1、149頁)。五霊大明神には、宝暦4年(1754)11月2日岩座神村が奉納した、豎2尺6寸(約80cm)、幅1尺8寸(55cm)の釣鐘がある。製作者は「姫路野里住治工芥田五郎右衛門宗郷」とある。芥田氏は鋳物師の棟梁であり、慶長19年(1614)方広寺大仏殿の鐘鋳造の際、芥田五郎右衛門が播磨国鋳物師棟梁として、国内の鋳物師を率いた⁽¹⁾。近世には、播磨国内寺社の梵鐘鋳造を独占し、さらに多可郡内は鋳物売場も独占したとある。

来光院神光寺には、本堂本尊十一面観音の宝前に、享保11年(1726)3月18日に奉納された、豎2尺7寸(約82cm)、幅2尺(60cm)の釣鐘がある。当時の住職妙彌隆範と発起願主として「武州豊嶋郡江戸住人菊池十蔵藤原武俊」の名がみえる。詳細は不明だが、江戸在住者が関係している。

2. 安政3年の全国梵鐘調査

この史料は、岩座神村庄屋・年寄・百姓代から白石忠太夫役所へ提出されている。多可町内の大袋区文書359、丹治区文書458に同年月、宛先も同じ「梵鐘取調書付」が現存する⁽²⁾。白石は、当時大坂代官として幕府領を管轄していた。同様の調査は全国で見られるが、これは安政2年3月3日幕府が発した「梵鐘鋳換大砲小銃令」によるものである。安政元～3年、水戸藩の徳川斉昭の影響下にあった老中阿部正弘が、海防政策の一環として、諸国の梵鐘を大砲に鋳造するという内容で、朝廷からの「太政官符」が発給され全国に伝達された⁽³⁾。

石清水八幡宮領の念仏寺にも、卯(安政2)11月の「口達書」があり、「近来諸夷引続入津致し、武備守要」の時であり、本寺や古来の名器、町鐘以外は残らず大砲や小銃に鋳換るよう、叡慮も出された、とある⁽⁴⁾(念仏寺文書35)。これに対して、念仏寺は「梵鐘之儀二付書附」(念仏寺文書24)に梵鐘はないと答えている。全国的な海防意識の高まりのなか触が出され、岩座神村の五霊大明神と神光寺の梵鐘の記録が残ったといえる。

註

(1) 脇田晴子「芥田氏」『国史大辞典』吉川弘文館、ジャパンナレッジ版。

(2) 多可町教育委員会作成「加美区村有文書目録」。

(3) 岸本覚「神社の「鐘」は誰のものか—近世後期因幡地域における神仏分離の諸相」『立命館文学』660、2019。

(4) 東昇・竹中友里代編『石清水門前寺院・南山城地域の古文書』京都府立大学歴史学科、2016。

編集後記

歴史学科2年次の学生を対象に「文化遺産学フィールド実習」の授業を設け、長年にわたって基礎的な調査を実践する場として活用してきた。これまで、数多くの市町でお世話になり、夏休みを中心にフィールドワークをおこない、そのそれぞれの取り組みについては、その後の調査などを経て、単発で報告などにとりまとめてきた。今回、兵庫県多可郡多可町で分野横断的な調査をおこなうことができ、また科研のテーマである山寺研究を裨益する研究成果がまとまったため、本書を編むことになった。多大なご援助をいただいたみなさまに改めて謝意を表したい。(ひ)

表紙・裏表紙写真

上左：五霊神社の調査風景（菱田哲郎撮影）

上中：旧神光寺跡の調査風景（菱田哲郎撮影）

上右：岩座神地区文書の調査風景（東昇撮影）

下：岩座神地区の棚田景観（安平勝利撮影）

裏表紙：神光寺仁王門と千ヶ峰（岸泰子撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第29集

播磨神光寺と岩座神地区の文化遺産

編集 菱田 哲郎（京都府立大学文学部教授）
岸 泰子（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
発行日 2024年3月29日
印刷 株式会社 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2